

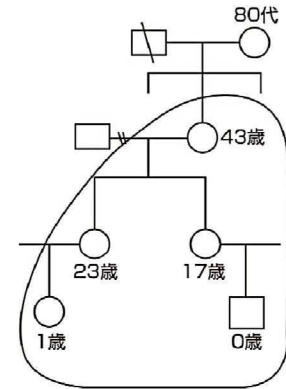
# 10代の母親が自分の将来について考えられる変化

## — 重度障害児を抱えて —

第1子が一〇〇〇グラム未満の極小未熟児で出生し、気管切開、人工呼吸器、胃瘻造設を行い、身体障害児手帳1級を受給した。約1年入院し退院した。第1子の父親は母親と婚姻する意志はなく養育費の支援も全く無い。生活は母親の実母（祖母）が中心にお金の管理や家事を行っている。

母親は母子家庭で育ち、母親の姉も1人で子育てをしている。祖母（母親の実母）はひとり暮らしをしている80代の親（母親の祖母）の介護をするために親の家によく出かける。母親は中学卒で、リストカットの経験が有り、あまり自分のことを言わないタイプである。心療内科の受診を勧めたが、主治医とあわないということで治療中断している。

第1子は1歳で退院し、退院後は訪問看護ステーションが支援することになった。第1子は15分に1回くらい吸引が必要な状況で、吸引はすべて母親が行っている。児の入浴は訪問看護師が母親と一緒にいる。1年の間に胃瘻のチューブが抜けて救急外来受診をしたり5～6回の入退院などあったが、状態が安定してきて、人工呼吸器を外すことができた。訪問看護ステーションの看護師のかかわりがよく、母親の気持ちを聞いてくれていた。何か変わったことがあると訪問看護師から保健師に連絡が来るようになっていく。



この方が何かあると私に連絡するんですよ。「今とてもね、リストカットがあったから、なんかお母さんが不安定だから〇〇（保健師）さん来て」って言って、私も来ながら、じゃあ何かできるかねって相談をしたりとかっていう形で、私はすごく、このステーションとのつながりがあるので、関係機関とのかかわりが、すごい強みなんですよ。

第1子は胃瘻からの栄養管理、気管切開、酸素吸入、1時間に1回くらいの吸引がある。母親の実母は不整脈と高血圧があるが、第1子の世話と親の介護で忙しく、動悸のため救急受診をしたこともある。母親の姉は喘息発作を起こして仕事を休むことがある。

訪問看護師から第1子のリハビリを始めた方が良くと提案があって、保健師が祖母（母親の実母）に同行して発達センターに相談に行った。第1子は3歳で訪問リハビリを開始した。バランスボールで練習しながら座位が取れるようになった。訪問リハビリを続けて1年ぐらいで立位ができるようになった。母親の表情も変わってきた。以前はひとの目を見ない暗い感じだったが、今はこんなに立つようになったとか子どもの話をするようになった。第1子の体重は7kgを超えた。

母親から子どもを発達センターの通所施設に預けたいという相談があった。今までは手続きを祖母（母親の実母）が行っていたが、「お母さん、一緒に市役所に手続きに行こう」と保健師は母親が手続きをできるように支援した。母親に「市役所に行く前に電話をして何が必要かを聞いて準備してね」といっておいた。市役所に行く当日、母親に電話で「市役所に聞いてみた？」と確認したら、「してない」と言うことだった。保健師が「一緒に行こうか？」と聞くと、「お願いします」と言うことだったので、一緒に

市役所の福祉課に行った。窓口の担当者が詳しく説明してくれて、母親も「いろいろなことを教えてもらった」と言っていた。市役所からの帰りの車の中で母親は保健師に「〇〇（保健師）さんの仕事ってどんな仕事？」、「〇〇さんがこの仕事に就くまでに、どんな勉強したの？」、「どんな学校行ったの？」、「どんなやればなれるの？」といろいろなことを質問してきた。「訪問看護師の仕事を見て自分もこんなになれたらいいなと思っている」と話した。

自分の将来を、ちゃんとね、明るいもの見てるって思えて、とてもそれ、うれしくてですね。本人が言ったのは、「自分は、でも高校を出てない。だから、高校に行くにはどうしたらいいの？」って言うから、この子を今抱えては、高校ちょっと厳しいよね。だから、そのためには通信教育ね、高校あるから、そういう通信を受けながら、ちょっと時間かかるかもしれないけど、高校の資格を取るっていうことはできるよ。そこを経て看護に行く時には、今のこどもがね、もうちょっと落ち着いて安定してきたら、きっと通える時もあるかもよっていう話をちょっとしたんです。そしたら、すごくそれに「あ、じゃあ、できるかもしれないんだ」って言って、とても前向きな意見が聞けたんですよね。だからもう、なんかすごく、私もすごくうれしかった。

訪問看護ステーションが頻回に訪問しているケースに保健師はどんな関わりができるのかと模索した。何回か訪問する中で、訪問看護の中での困り感とか、時々お母さんとの疎通が取れなかったりとか、担当者を代えてって言われたりとかがあって、訪問看護が行ってればいいわけではなくて、その中での問題があるんだなっていうのに気づいた。関係機関が行ってればオッケーじゃないんだ、その調整をやる役目に私がいるんだなっていうのを感じた。保健師は、関係機関とケースのつながりや関係機関同士のつながりを作ったり、調整したりしている。

当初かかわってる時、ほんとに何、私が何をやる役割かっていうの見えなくて、一緒にお風呂に入れたりしてましたからね。でも、それも今考えれば、いい経験だったなって。訪問看護師さんが1人で入れるの、つらそうなんです。動くし。その時に、私もズボンを半分上げて靴下脱いで一緒に入れて、一緒に乾かして、一緒に吸引もお手伝いしてっていう感じでやって、何回かそういうことを繰り返して。やっぱり一緒にやってくると、訪問看護師さんとしては、別にやってって言うわけじゃないんだけど、一緒にやることで、この子の状態だったり、実際にケアしながらかかわるから。

その後から、訪問行った後にですよ、「保健師さん、後でステーションに寄ってください」って何回か言われたんですよ。そこでちょっと話し合いたいからという。そうすることで、つながりが出てくるんですよ。だから、向こうも電話しやすくなってくるし、私も何かあったら問い合わせするしという連携が取りやすくなっていった。

感想：母子を支えるためにさまざまな関係機関がケースにかかわっている。保健師が自分の専門分野から1歩踏み出して他の専門職と一緒に作業をすることで、他職種の支援内容をより深く理解でき互いの信頼関係が増し、協力体制がより強固になっている。

(小笹)